

表紙・・・裏

みなさんこんにちは。私は今から 600 年くらい前の室町時代に平野のお寺で修行をしていた尼さんで慶心といいます。今日はみなさんに聞いてほしいお話があって、こうしてやって来ました。早速ですが、みなさんは地獄って知っていますか？

そう、地獄は、悪いことをしたまま反省しない人が行く所で、一度行ったら、何年も何年も苦しみ続けなければならない所なんですよ。

地獄なんてうそって思ってる人いるでしょ？

でも、地獄って本当にあって、それはそれは怖い所なんですよ。私は二度も見てきたんですから。

だから今日は、みなさんに私の見た地獄のお話と、地獄に行かずにすむ方法をお話しますから、どうか最後まで聞いてくださいね。

表紙・・・裏

私はいつものようにお寺でお経を読んでいました。

すると、突然気分が悪くなってどこか深い穴の底に落ちて行くような気がして、そのまま倒れてしまいました。

お寺と一緒に修行をしているみんなが驚いて「慶心さん、慶心さん」と大声で呼ぶので、「大丈夫です」と言っているつもりなのですが、なぜかみんなには何も聞こえないようでした。

そうしているうちに、お寺の住職さんやみんなが「大変だ、慶心さんが死んでしまった」、「あんなに元気だったのになぜ急に死んでしまったんだろう」と大騒ぎをしたり、悲しんで泣いてくれたりするのです。

どうも私は死んでしまったようでした。

表紙・・・裏

ふと気がつくと辺りは真っ暗で、そこは私の全く知らない所のようにでした。「いったいどうなってしまったのかしら」と思っていると、大きな鬼が二人やって来て、「私たちは牛頭と馬頭という者だ。今からお前の魂を抜き取る」と言って私を捕まえたのです。

私は怖くて怖くて泣き出してしまいました。

その時、「摩りを放しなさい!」という、やさしくて、でも力強くはっきりとした声が聞こえてきたのです。

表紙・・・裏

鬼たちは、私をおいてあわてて逃げて行きました。

「ああよかった、誰が助けてくれたのかしら。早くお寺に帰りたいわ」と思っていると、どこからともなくまたあの声が聞こえてきました。

「この縄につかまって行きなさい。この先、針の山や三途の川がありますが、この縄につかまって行けば安心です。さあ行きなさい。」

私は、お寺に帰れるものと思い、喜んで縄をつかんで歩き始めました。

表紙・・・裏

ずいぶん長いこと歩きつづけたのに、お寺は少しも見えて来ません。私はだんだん心細くなってしまいました。とそのとき、目の前に大きな門が見えて来ました。

恐る恐る門をくぐると、そこには今まで見たこともないほど美しい宮殿がありました。

「ここはどこなのかしら」、そう思いながら、私は辺りをきょろきょろ見まわしました。

するとやさしいお顔をされた観音様が現れて、「慶心、私があなただをここまで導きました。

ここは閻魔さまの宮殿なのです。いきなり呼んで驚いたでしょう。閻魔さまが、あなたのお寺の住職をここへ呼ぶようにおっしゃったのですが、住職はお年よりですから無理をしてこんな遠くまで来ると、本当に死んでしまうかもしれないので、あなたに代わりに来てもらいました。閻魔さまがお待ちです。さあ行きましょう」と言うのです。

私は腰を抜かすほどびっくりしてしまいました。

表紙・・・裏

宮殿の真ん中に行くと、そこにはなんとも恐ろしい顔をした閻魔さまがいらっしや
って、私を見ているではありませんか。

私か怖くてびくびくしていると、閻魔さまは「人間たちは悪いことばかりしている。
けんかはするし、嘘はつくし、意地悪で欲張りで人を悲しませてばかりいてどうし
ようもない。おまえは寺に帰ったら、毎日良い行いをするように気をつけろ。そして
みんなにも、良い行いをするように伝えよ」と、とても大きく恐ろしい声で言いまし
た。

その声の大きさといったら、まるで、すぐそばに雷が落ちたようなものすごい声で
した。

表紙・・・裏

閻魔さまは、「死んだ者は全てわしの前に連れてこられるのじゃ。わしは、その者が生きていた時にどんなことをしていたか、詳しく書かれた閻魔帳を見て、良いことをしていた者は極楽へ、悪いことばかりしていた者は地獄へと送るのじゃ。皆に地獄の話ができるようにしっかり見て行け。私か地獄を案内しよう」と言われました。私は閻魔さまに連れられて、血の池地獄の明かりがギラギラ照り返し、焦熱地獄から立ち昇る煙や、どろどろに煮えたぎる鉄の熱気でとても息苦しい地獄を長い間見学しました。

地獄のあちこちには、「助けてください」、「悪いことをしなければよかった」と悔しそうに、悲しそうに泣き叫ぶ人々の声が響き渡っていました。

表紙・・・裏

長い間恐ろしい地獄を見学した後、閻魔さまは「お前が地獄に来たしるしに判を押してやろう。わしが話したことや、ここで見たことを元の寺へ帰って皆に伝えよ」と言われ、私の額に判を押されました。

私が寺に帰ると聞いて、地獄で苦しんでいるたくさんの人々が、「私が地獄でとてもとても苦しんでいることを家族に伝えてください。そして、もっと私を供養するように言ってください」と頼みにやって来ました。

「わかりました。ぜひ伝えましょう。」

表紙・・・裏

元の寺に帰ることのできた私は、うれしくて、毎日毎日一生懸命お祈りをして、ひとつでも良いことをしようと頑張りました。

そして、村の人々にも閻魔さまのことや地獄の恐ろしさを話し、良いことをたくさんするように勧めました。

ところが、「學むさんは、おかしい夢を見たんでしょう」、「慶心さんは作り話をして、私たちを怖がらせようとしている」と言って、誰も私が地獄へ行って来たことを信じてくれません。

どうしたらみんなに信じてもらえるのか、私は困ってしまいました。

表紙・・・裏

それから 3 年が過ぎたある日、私か住職さんと一緒にお経を読んでいると、目の前に青い蜘蛛が下りて来ました。

「あの蜘蛛を取ってくだされ」と住職さんがおっしゃるので、私はその蜘蛛をつかみました。

するとどうしたことか、私の手は蜘蛛をつかんだまま開かなくなってしまい、気が遠くなってしまったのです。

表紙・・・裏

気がつくと、眼の前に閻魔さまがいらっしゃいました。

閻魔さまは、「お前は頑張っているようだ。だが、たくさんの方は、お前の話を信用しない。もう少し頑張って、皆が良いことをするように勧めよ。前にお前の額に押した判が薄くなって見えなくなってしまったから、今度は、手のひらに押してやろう。これを写しとって人々に渡せば、みんなお前の言うことを信用するだろう」と言われました。

眼を覚ました私が、そっと手を開いてみると、手のひらには青く光るお舍利と閻魔さまの判がちゃんとあったのです。村人たちにこの判とお舍利を見せると、今度はみんな私の話を信用してくれました。それからは、村人たちは、いつも人を思いやり、みんな仲良く楽しく暮らしていきました。

表紙・・・裏

これで地獄のお話はおしまい。

みなさんも、意地悪をしたり、けんかをしたり、動物をいじめたり、人の物を取ったり、人を悲しませたりすると地獄に行って苦しむことになるんですよ。

でも、誰でもたまには悪いことをしてしまうもの。

もし悪いことをしてしまったら、「ごめんなさい」と一生懸命に謝りましょう。

もし声に出して言えないのなら、心の中で「ごめんなさい」と謝って二度としないようにしましょう。そうすれば閻魔さまはきっと許してくれますよ。

この紙芝居は平野の長宝寺に伝わる「よみがえりの草紙」というお話を元に作りました。青いお舍利(仏様の遺骨。塔に納めて供養し信仰の対象とされた)と閻魔様の判は今も長宝寺に伝えられています。